

「聞き書き研修」テキスト《事前学習用》

『塩野米松流 聞き書き術』

(第1回 森の“聞き書き甲子園”事前研修—平成14年8月27日 塩野米松先生の講義より)

1, 『聞き書き』の魅力

◆通常ではあまり話さない人と深く話せる

皆さんは同世代の人たちとは話をするでしょうけれど、自分たちの先輩とか、お父さん、おじいさんの世代の人たちと話をするのはなかなかないと思います。僕も自分の親とは話をしづらいし、ちょっと話ただけでも、なぜかすぐ腹が立ってしまって話を聞くことができない。けれども、よその年上の方から話を聞くとなると、けっこう素直に聞けるものです。

本来、初めて会った人に「お子さんは何人いらっしゃいますか」、「仕事の上でどんな失敗をしたことがありますか」なんていうことは、なかなか聞けるものではないのですが、聞き書きの面白さのひとつは、インタビューという形式をとりながら、初対面の方や世代の違う方にいろいろな話を聞くことができることです。

◆民俗学の資料に匹敵

『聞き書き』によってまとめた文章は、正確な内容に仕上げると、民俗学の資料としても使えるような価値のあるものにもなります。高村光太郎の父・高村光雲という彫刻家は、明治維新の頃に上野の戦いを見たり聞いたりして覚えていました。後日父からその時の話を聞いた高村光太郎は、父の回顧録を一冊の本にまとめました。『維新懐古談』という本で、岩波文庫で出ています。

その内容は今でも当時の戦いや庶民の生活を知る上で、最も優れた資料のひとつとして使われています。実際僕が読んで、その回顧録には、時代を写す風俗が切り取られているのでとても面白い。例えば職人はみんな同じものを食べたり着たりしているように思われているけれども、それぞれの職業に合った食べ物、着る物、身のこなしがある。こうしたことをひとつずつ正確に聞いて書きとっていくことで、民俗学の資料としても価値のあるものになるのです。

だから、聞き書きの作業は、日常に埋もれてしまいそうな、その人の生活や考え方、仕事のことなどを聞き出し、正確に書き写す力とその心構えが大切です。

◆聞き手の人生を反映する文芸

『聞き書き』は『語り』とは違います。『語り』は、こちらが聞かないでも、ずっと一方的に喋っている。「落語」がそれに近いですね。それを録音して文章に書き起こしても『聞き書き』とはいわない。これは、小説家が小説を書くのと同じ様に、語り部が自分の意志だけで自分の人生などを皆さんに話しているのです。

一方、『聞き書き』は相手に質問をして話してもらいますから、そこには聞き手の意志が反映されます。何を聞くか。そして返ってきた答えに対して、次はどういう質問を続けて聞くのか。それによって相手の答えも変わっていきます。だから『聞き書き』でまとめた文章は、一見、話し手の人生の様に見えますけれども、実は聞き手の人生も映している文芸形式なのです。

たとえば、同じ人に幾人かの人が『聞き書き』をしたとしても、それぞれの聞き手の個性によってまったく違う『聞き書き』の本ができます。

皆さんの場合は、16歳～18歳の高校生でとても若いですね。これから話を聞きに行く「森の名手・名人」の人たちの仕事の内容はほとんど知らないでしょう。そうした全くまっさらな状態で行った『聞き書き』は、僕がやる『聞き書き』とは全く違うと思います。読む人たちにもそれはよくわかるはずです。でき上がった文章の中には聞き手の具体的な質問は書いていないけれども、返ってきている答えの中に聞き手の姿が浮かび上がってくるのです。

「この人は何も知らないからこういう質問をしているんだろう。」「細かな話をしてもわからないかも

しれないかから、わかりやすく大きく答えておこう。」という具合に答えてくださる話も聞き手の容量次第で変わってきます。では、そういう『聞き書き』が素人だから役に立たないかという、そういうことではありません。みなさんがまとめた『聞き書き』の読者には、皆さんと同じように何も知らない人たちがいます。その何も知らない人に、その人の仕事をどう紹介すればわかりやすいか、という時に、皆さんの率直な質問の方がより有効かもしれないのです。

そして何より、大事なことはこの『聞き書き』を完成させることで、18歳の皆さんの姿がそのまま映った文芸作品ができ上がるのです。

そういう意味で、僕は話を聞く人はリマス試験紙のようなものだと思っています。18歳、28歳、38歳、48歳、58歳、68歳、78歳の人たちが同じ人に同じようにインタビューをしてまとめても、違うものが出てくるでしょう。それがとても大事なのです。

◆相手の人生が職業を通じて浮かび上がる

石垣を組む職人さんに石の組み方という「技術」について話を聞いて文章にまとめても、実はなかなか伝わらないものです。もし「技術」だけを記録するのであれば、文章よりも映像(ビデオなど)を使った方がいい。しかし一方で、彼の「生き方」は「技術」の話を書くことを通じてでないとなかなか見えてきません。これはどういうことかという、たとえば、船大工は僕たちから見ればひとつの職業だけれども、彼と彼の家族から見れば「船大工という生き方」なんです。だから船をつくる作業工程を聞く中でその人の職業を知り、その人の「船大工という生き方」を浮かび上がらせていくというのが、実は『聞き書き』の最大の仕事なのです。文字をもって、「その人の職業を通じ人生を浮かび上がらせる」という作業を文芸といいます。ここまで『聞き書き』ができあがればその作品は文芸と言えます。

さらに、話し言葉で書くので、上手にまとめればとても読みやすく、また、その人の人柄や生まれ育った背景、さらには人生の裏側まで読み取ることができるものに仕上げられるのです。

◆他のノンフィクションとの違い

人にものを聞いたり、観察して表現していく「ノンフィクション」の形式には、『聞き書き』以外にもいろいろあります。

通常ルポライターと称する人たちは、同じように話を聞きに行き、自分の言葉でまとめます。相手が喋った言葉を使う時にはカギカッコ(「 」)を使い、それをつないでいく地の文章は自分の言葉で書きます。カギカッコ(「 」)中には、基本的に相手の人が喋った通りの言葉を入れて嘘をついたり、言い方を変えてはいけぬ、というのが「ルポルタージュ」の基本です。しかし、ルポライターは自分の意志と考えをもって、たとえば、その事件の当事者や周囲の人に話を聞いていきます。

基本的な文章のまとめ方は、聞き手であり、ルポライターである彼が、彼の意志で書くというものです。相手の意志や聞き手の意志が文章に表れるという点は『聞き書き』と共通していますが、表現の方法としては全く違うものです。

そのほか、『エッセイ』という形式もあります。日本の場合は、取材した事実を元に、自分の感情を写し取ったような形で文章に表現したものをエッセイと読んでいることが多いようです。

ほかに『自叙伝』もしくは『伝記』という形式があります。『自叙伝』は自分で書くもの、『伝記』は他の人が調べて書くものです。欧米の伝記作家の場合は、その人の個人的な手紙まで見せてもらったり関係者の証言を集めたり、膨大な資料を元に伝記を書き上げます。まだ故人や家族が、手紙や私物を公開したくない日本の場合には、この西洋流の伝記作家はあまり現れていません。

『聞き書き』はこうした方法とは異なったやり方です。相手に話を聞きながら、その話し手の言葉だけで文章をまとめていきます。こういう形式は世界でもなかなか珍しい。日本独特とはいかないまでも、不思議な文芸形式のようです。

2、『聞き書き』を行う準備

◆心構え・・・話し手に心を開いてもらう為に、その人を尊重・尊敬する姿勢を持つ

これから相手の方と初めて会って話す時に何が一番大事かという、まず自分のことをわかってもらうことです。そうしないと、相手は心を開くことができません。これは普通の会話や人との付き合いでも同じです。相手がどんな人かわからないのでは、話のしようがないのです。では、自分のことをわかってもらう為にはどうしたらいいのでしょうか。それは、まず相手を尊敬することです。たとえば、その人がおじいさんであれば「その歳までひとつの職業を続けて生きてきた」というそのことだけでもすごいと思いますし、その上、僕のような者に、ご自身の人生を話してもいいよと言ってくださっていること自体がすごいことだと思うのです。そういう敬意をこめた態度で『聞き書き』に臨むことで、相手の方も心を開いて話してもいいかなと思ってくれるものなのです。

◆勉強と準備

①その人のことをよく勉強して知る

話を聞きに行く前には、できるだけ相手のことを知っておくようにします。特に皆さんの場合は、その人の職業についてほとんど初めて聞くことになる。たとえば石垣を積む職人さんに話を聞きに行くことになったとします。その場合、「石垣ってどんなものだろう」と図書館やインターネットを使って調べる。そうすると、石垣を積むには「ゲンノウ」とか「ノミ」という道具があるとか、その道具は地方によって呼び方も形も違うとか、石を組んで石垣を作ることは、今は法律上規制されていて出来ないから石垣の裏側にコンクリートが塗ってあるとか、いろいろなことが調べた中でわかってくる。たとえ、そういうことだけでも、わかる範囲のことは調べてから話を聞きに行った方がいい。なぜかという、聞き手が何も知らなすぎると、話し手は相手との会話に興味を持たなくなるからです。『聞き書き』の内容も薄っぺらなものになってしまうのです。

②質問を用意していく

皆さんははじめて『聞き書き』をする人がほとん

どだと思えますから、質問事項のリストは用意して行った方が良いでしょう。質問事項はいろいろなことを想定しながらつくりまします。自分が文章にまとめるならば、これだけの質問が要するというものを考えておきます。

その人が何年生まれで、生まれた環境はどうだったか。その人の仕事はどんな材料を使って、どんなふうにも物を作るのか。または育てるのか。または捕るのか。道具は、その技の手練法は。さまざま聞くことがあります。

ただ質問を並べても、相手からの返事が「はい」とか「違います」というだけだと文章にはなりません。できるだけ質問に対して具体的に話してもらわなければならない。紋切り型の質問を繰り返していると、でき上がった原稿はつまらないものになってしまうでしょう。

質問事項を考えていきますが、相手の答え次第では、新たな質問を追加しなければなりません。

話をしながらいろいろな事を考え、返事をしてもらった中身に疑問があればすぐにメモを取り、それをまたタイミングよく質問していきます。しかし、上手に聞こうと思ってもなかなか難しいことでしょう。自分のありのままを相手にぶつけて、相手のありのままの答えを引き出す。その為には、こう聞いてこう答えたら次にこういう質問しようとか、はじめは、ある程度、作戦がいるかもしれません。さらに、インタビューの最中に一番困るのは、お互いが黙ってしまうことです。多分、相手は何を話したらいいか戸惑っているのでしょう。そのときは相手が話さなくても、聞き手が話をしなければなりません。自分のこと、家庭のこと、学校のこと、祖父母のこと、場を保ち話し手が心を開きやすくします。こうした事態に対応するのはテクニックではなく、みなさんの真摯な態度と一所懸命さです。

◆録音を確実にを行う為の用意

①自分のテープレコーダーの特徴と録音機能の確認

小さいテープレコーダーの録音装置には、「録音」と「再生」の2つのボタンを同時に押して録音するものとか、録音ボタンしか押さないものなど、

いろいろありますので、あらかじめ確認しておきましょう。また、僕の場合は自分の声が響く声なので、いろいろ試した結果、テープレコーダーは縦に置いてマイクを相手に対して横に向けるのが一番いいとわかりました。ご自身のテープレコーダーの使い方や特性をよく知った上で、マイクを置く位置などにも気をつけてください。

また、最近は様々な機能がついたテープレコーダーがあると思いますが、人が話した声(音)に反応してテープが回り出す装置は使ってはいけません。これを使うと、回り始めがワンテンポ遅れてタイムラグとなり、話し手の言葉の出だしを録音することができない場合があります。

②録音できているかどうかを確認する

何度インタビューしても、心配することがあります。テープにきちんと音が入っているかどうか、ということです。実際にインタビューの最中に録音しているはずなのに、中に音が入ってなかったことはよくあります。くれぐれも、テープを回したらすぐにイヤホンを入れて、音が録音されていることを確認してから、話を始めるようにして下さい。

③テープは途中で止めない

僕は録音するときには、120分のテープを基本的に使っています。録音テープの質としてはあまり良くありませんが、肝心な話の最中にテープを交換しなくてはいけないことがよくあるので、できるだけ録音時間の長いものを使っています。さらに、どうしても聞き逃してはいけない話を録音する時には、2台のテープレコーダーで、片方は90分の短いテープ、片方は120分のテープを使うことで、テープを交換するタイミングが重ならないようにします。そして、無駄なようでも二人で話をしている間はずっとテープを回し続けてください。お茶が出て「まずひと休みしなさいよ」と言われてもテープは回し続ける。この時に録音を止めてしまうと、いつのまにか話に夢中になって気がついた時には録音していないということがよくあります。また茶飲み話の間に、大事な話をしてくださることがよくあるのです。テープはとにかくずっと回しっぱなしにしてください。

④電池とテープは新しいものを用意する

録音機に入れる電池は必ず新しいものを使います。電池容量が少ないと、録音中のテープの回転速度が遅くなる場合がありますので、通常の状態でも再生した時にテープの回転速度が速くなったり、声が高くなったりします。聞き取りづらく、何度も聞き直さなければならないので、テープを書き起こすのに手間がかかります。電池と同様に、テープも新しいものを用意してください。こういう消耗品をケチると、貴重なインタビューを書き起こす段階で支障をきたし、あとで後悔することになります。

⑤持ち物リスト

テープレコーダー(中に新しい120分テープ1本と新しい電池をセットしておく)、外部マイク(テープレコーダーにマイクが内臓されている場合は不要)、120分テープの予備2~3本、電池の予備、メモ用のノート、筆記用具、カメラ、写真用フィルム(カラーネガ)、カメラ用の電池。

*デジタルカメラを使う場合は300万画素以上のものを使ってください。最終的に皆さんのレポートを「作品集」として印刷するときには使用する場合、せっかくの写真がぼけてしまいます。詳細を見たいと思ったときに画素数が少ないと確認できないことがあります。

3、まず相手の人に伝えること

①『聞き書き』とはどういうものであるかを伝える

②録音させてもらうことの詳細を得る

③原稿はご本人に確認し、不都合があれば修正・削除できることを伝える

まず皆さんは『聞き書き』をする相手の方の家に伺って、挨拶をしますね。簡単な自己紹介をして、「これから『聞き書き』をさせていただきます」とお願いします。でも、相手の方は『聞き書き』とはどういうものかを知りません。ですから、『聞き書き』とはどういうものかということを説明しなければなりません。「これからお話しして下さる中身を文章にまとめます。私が質問をして、お話いただいた言

葉を書き起こし、それを文章にまとめます。」というように、まず説明します。

そして、テープレコーダーを出す時に、「申し訳ありませんが、テープレコーダーに録音させてください」とことわる。何のことわりもなしにテープレコーダーで録音するのは相手の方に失礼なことで、ルール違反なのです。また、録音してしまえば、それは自分のもののような気がしますが、そこで話された言葉は相手の方のものです。だから、はじめに相手の方にも、話した言葉がすべて録音されることを覚悟してもらわなければいけない。さらに話す途中で、相手の方は「こんなことまで話して良いかな」とためらう場合がありますので、「最後にまとめた原稿をお見せします。もし不都合なところがあれば、あとから削ってくださって結構です」。もしくは、「最後に原稿を整理する段階で、ご相談させてください。」とっておきます。こうしたやり取りをきちんとしてないと、いずれにしても相手の方に信用されず、本当のことを話してくれないものです。

4, 聞く

◆『聞き書き』は対話でできあがる

『聞き書き』というと、「聞く」という言葉のイメージで、どうしても相手の方に一方的に質問する、インタビューするという形式に聞こえますが、実はお互いの「対話」なのです。お茶飲み話の延長で、話をずっと聞いていく。だから相手ももちろん話しますが、僕もただ聞いているだけではなく、話をします。二人で話をしながら対話形式でずっと物語が進行して、時々、話の流れが元に戻ったりしながら、いろいろな話をしていく。人というのは、話をする中でしか思い出さないことがたくさんあるのです。また、話をしているうちに自分の考えがまとまるということがあるのです。皆さんが聞きに行く相手は、答えをはじめから用意して待っているわけではないのです。皆さんが話しかけることによって答えを見つけたり、「ああ、そういう言い方があるのか。それならこういうふうにする場合もあるんだよ。」という様な、表現をみつけてくださる。

こちらから話しかけない限り、向こうから答えは返ってきません。自分が話をするので、相手の言葉を聞き出していき、これが単純なインタビューと違って、『聞き書き』のとても面白いところなのです。

◆相手の人が当たり前だと思っていることを聞き出す

インターネットや図書館で調べれば、自分が知りたいことはだいたい分かります。けれども、自分が相手の方に質問して、はじめてわかることもあります。僕は、自分で本を書く為に『聞き書き』をしますが、そのときには、どこの資料にもなかったことを聞くようにしています。それは、本には書いてなくても、たとえばその職人さんにとっては日常の、当たり前のことだったりもするわけです。『聞き書き』で大切なのは、相手の方が当たり前だと思っていることを上手に聞き出すことです。自分が今まで本で見た、どの川船の写真よりも、この熊野川の船は変わっている。平たくて、幅が広い。これはなぜなのか。たとえば、そういう質問をします。相手の方にとって自分の船だけが自分の人生ですから、それを当たり前だと思っている。聞き手の事前の勉強による質問を受けない限り、その人自身からは、その疑問に対する答えは出てこないのです。

◆最初に用意した質問を基本として、後は相手の話の中から新たな質問を作り出す

「質問事項のリストを用意して行った方がいい」とお話ししました。しかし実際には、その用意した質問だけだったら、30分もかからないうちにインタビューは終わってしまうでしょう。だから聞かなければいけないと思うことをまず基本に置いて、後は相手の答えの中から、その場で質問事項を作り出していくのです。

たとえば、大工さんに「どういうふうになると、かんなを上手にかけられますか。」と質問してみる。「自分の腰の幅に足を広げるのがいい」とか、「右足を半歩踏み出すのがいい。これがかんなを削るのに一番疲れないやり方だ。」という返事が返ってきます。その話を聞いたら、その場で、さらに

質問を足します。たとえば「それは誰に教わったのですか？」と聞いてみる。そうすると「自分のお師匠さんに教わりました。お師匠さんは、自分が前かがみになってかんなを削っていると、必ず箒の柄でひっぱたいた。」と話してくれる。その答えを受けて、また次の質問をします。「ひっぱたかれた時、どう思ったのですか。」と聞いてみる。「非常に腹が立ったけども、お師匠さんの言うことだから仕方なく、その通りにやった。今までずっとそれでやってきた。だけど、自分が弟子を持つようになって初めてお師匠さんが殴った理由がわかったよ。」こういう会話をずっと繰り返していくと、かんなのかけ方を聞きながら、その大工さんの師弟関係がわかるようになります。そして、話を聞くうちに「お師匠さんは別に先生じゃないし、弟子から授業料をもらって教えてるわけじゃない。むしろお師匠さんは弟子に小遣いという形で賃金を払っている。その上、技術を教えてくれている。徒弟制度の中で殴られたり蹴られたりするとは、僕らが思っているほど嫌なことではないのかも知れない……。」といったことに気づくのです。このようにひとつの動作や技術の中からどれだけの話を聞き出していけるかが、『聞き書き』の大事なところなのです。

このように話すと、とても難しそうに聞こえるかも知れませんが、やってみればわかることです。その人のところに行って、話を聞きながら君たちが疑問に思ったことを積み重ねていく。そうすれば、僕が今、説明しているようなことに必ず行き着くのです。

◆核心に近い部分は、聞き方を変えて何度も引き出す

僕は自分で『聞き書き』をしながら思うのですが、僕がもし刑事であれば供述書も上手にとれるのではないかと思います。『聞き書き』という作業の核心は、尋問調書をとると多分似ているだろうと思うのです。僕が質問をすると相手からは答えが返ってきますが、その答えでは満足できないことがよくあります。どこか納得できない。そうするとその都度、聞き方を変えて、何度も質問を繰り返しながら、同じことを聞く。そして、疑問に思う

ことが出てくると、また聞く。さっきはこう言ったけれど、自分が今まで読んできた資料ではそんなことは書いていなかったから、もう一度、聞いてみようと思う。何度も聞いて、問題の核心に近い部分を引き出していくのです。

◆録音機に頼らないでメモをとる・疑問はメモを取りタイミングよく質問する

相手の言葉で分からなかった言葉は、次に聞くためにメモをとります。テープレコーダーだけに頼ると、だんだん相手の言葉を聞かなくなるものです。その為にも最初からノートを広げて話をメモしていくのが後々の作業としては一番楽です。書き、メモすることで、相手の言葉をできるだけ頭に記憶した方がいいのです。キーワードを記憶し、次の質問に挟み込むことで、相手の反応も変わってきます。

僕はよく野山を歩きますが、初めて野山を歩いて自然観察する人たちに「カメラは使うな」といいます。それは、写真の中に記憶したものは、自分の頭の中に記憶されているわけではないからです。後で写真を見ればわかるだろうと思うでしょうけれど、自然観察する基本的な力を持ってない人がどこをどう見ればいいのかかわからない状態で写真を見ても、結局それは写っているだけということになってしまいます。それだったら、その場でスケッチをした方がいい。メモをとった方がいいのです。

そうすれば、どこから葉が出ているのか、花びらは何枚あるのか、細かなことが見えてくるのです。テープレコーダーやカメラといった機械に頼りすぎると、後々にまとめる作業が大変になります。そうは言っても、実際にインタビューすると相手の話に没頭してメモを怠ったり、「今の話は後でもう1回テープを聞けばいいや」と思うようになってしまふことがあります。そういうことはきっと後で後悔する原因になります。特に、メモするときには大事なのは、その場で気がついた疑問をメモすることです。そして、その疑問は、相手の話の流れを損なわないように、タイミングよく質問するようにします。

※少し高度な技術ですが……あとから話の内容を思い出せるならメモを取らないというのが本当は一番いいのです。聞き手は話し手のひとつひとつの動作に注意深く気を使っているの、何か話した言葉を僕がメモを取りますと、「あ、そういうことを話せばいいんだ」と向こうは思う。もしくは、「今メモを取ったけど、どういこととでメモを取ったんだろうか」とも思ったりするのです。だから道端で会ったり、お茶飲みながら話しているように話せるなら、本当はそれが一番いい。その為、テーブルコーダーを置いたときも、相手に録音することの了解を得たら、テープで録音しているということはできるだけ忘れてもらうように話をするのが一番望ましい。これもなかなか難しいのですが。

5, たくさんの分からない言葉

◆その職業独特の用語は重要。話を聞きだすキーとしてどんどん質問していこう

たとえば職人さんに話を聞きますと、わからない言葉がたくさん出てきます。道具の名前、木の種類、一つ一つの単位、恐らく皆さんにとってはすべて初めて聞く名前だと思います。それを、ひとつひとつ確認していかなければいけません。たとえば石工さんの場合でいうと、石を打つための「かなづち」があって、その「かなづち」に使う「柄」があります。この「柄」は職業によって全部違います。地方によっても違います。自分の体に一番ショックがなくて、折れなくて、長持ちして、手になじんで、汗をかいても手から滑り落ちない、そういう木を使います。しかもそれは、自分たちの一番身近にある木でなければいけないのです。遠くから買ったり、道具屋さんに行って買ってくるようでは、すぐに修理して使えないからです。ですからインタビューでは「その使っている道具の柄は何ですか」と聞いて、その木の名前を覚えて、「なぜその木を使っているのですか」とまた聞く。こうした質問を繰り返していきます。

木には年輪があります。真中の方は赤くて外側は白い。林業高校とか、農業高校の人たちはそういうことを授業で教わったり、実習で見ているかも知れない。でも普通高校の人はそういうことを知らない人が多いと思う。白いところの木を使って

つくる道具、赤いところの木を使ってつくる道具があります。年輪の中心の所は舟には使いませんが、それも質問をすれば答えてくれると思います。「なぜその白いところを使わないんですか」、「これは腐りやすいからだ」、「じゃあなぜ芯の赤いところはなぜ使わないんですか」、「ひびがはいるからです」、「では舟はどこの部分を使って造るのですか」、「木の真ん中の、すぐ両脇の所を使った船が一番いい船なんですよ」。こういう話のやり取りをすることが大切です。

たとえば鍛冶屋さんが刀をつくろうとしているとします。炉の中を覗いて、「これは何度でしょうか。」と聞くと、よく勉強をしている鍛冶屋さんは「725 度という臨界点がありまして、その温度を超えることを目指していますので、今は 725 度よりやや上がったところだと思います。」という言い方をしてくれる。しかし、これは本来の鍛冶屋さんの言い方ではありません。鍛冶屋さんは炎の色を見て温度を推測している。だから、夕焼けの色ではまだ低くて、もう少し明るく白みがかってきた時には 725 度を超えている基準を持っているのです。炎を使う職人たちは計測機器を使うことはまずありません。これは炭焼きも、焼き物屋さんも、皆そうです。その焼き物屋さんが考える温度の基準、それを焼き物屋さんが使う言葉で聞き出せるかどうか、それが『聞き書き』を成功させるコツです。

◆自分の中の常識や想像を疑う

①嘘を書かない為にも、具体的にモノを見せてもらって目で確認する

年配の大工さんや石屋さん、桶屋さんは、長さを言うのにセンチとかメートルという単位は使わずに、一尺とか何分といった「尺貫法」を使います。なぜかという、昔から自分の体を物指しにして馴染んだ言い方で、その方が使い易いからです。

たとえば「2分の釘を使います」という話があったとします。僕らの頭の中では、釘は鉄でできていると思込んでいるかもしれない。そして、平らな頭のついた釘だといわれたとたんに、普段見る釘を思い浮かべるかも知れません。でも、実はこ

れは、鉄の釘ではなくて、竹でつくった釘かもしれません。そういう勘違いはいくらでもあるのです。しかも、舟をつくる時の釘も、宮大工さんが五重塔をつくる時の釘も、僕たちがすぐに思い浮かべる形の鉄の釘は1本も使われません。頭の中でわかったつもりになってしまうと、肝心なことを聞いて確認してくることを忘れてしまう。そうすると、僕たちが「常識」だと思って「はい、はい」と聞いてきたことが、原稿に書き上げた時には「嘘」になってしまうことがあるのです。

また、話の中のでは「あれ」「これ」と言っているあいまいな言葉も、文章にまとめるときには具体的な言葉に置き換えなければなりません。たとえば、目の前に道具を持ってきてもらって話をする時に、相手の方が「この道具はね……」といったとします。文章にするときには「この道具」では読者にわかってもらえないので、この、の後に名前をきちっと聞いて、たとえば「このゲンノウは……」に置き換えます。「長さは、こんなもんだな」と言った時にも、ざっと見て30センチであれば「30センチ」と自分のノートにメモしておきます。そして、文章に書くときには具体的な数字を入れる。そういうことにも注意しながら『聞き書き』をしていきます。

そのためにも、話の途中で、仕事場や使っている道具、でき上がった品物、材料などは、できるだけ実際に見せていただきます。そしてそれをきちんとメモに取ります。もちろん写真を撮ってもいいのですが、先ほどいいましたように写真だけでは、見落としてしまうこともあるかもしれないので、きちんとメモにもとります。そして、職人さんそれぞれに呼び方があるので、それをどう呼んでいるのかも聞きます。例えば、木一本持ってきてそれを使うときに僕たちは根元の方を「根元」、先端を「先端」と普通に言っていますが、職人さんは根元を「モト」、先端のことを「ウラ」と言ったりもします。あるいは「日面」、「日裏」という言葉もあります。日が当たる側と日が当たらない側という意味で、それによって木の性質が違うのです。一本の木を使う場合にも、どこの部分をどう使うのか。なぜそうするのか。そういうことも、できれば具体的な物を見せてもらったり、紙に絵を描いてもら

ようにします。

②相手の頭の中にあるモノの形は、絵や図面などを描いてもらって確認する

岡山の船大工さんに話を聞いたときに、こんなことがありました。ここでは、舟をつくるときに、木を合理的に使うため、ねじったような製材の仕方をします。この船大工さんは設計図も何も描きません。自分の川に合わせた舟を先祖代々造ってきているのです。だから、長さがいくつの舟が欲しいといえば、もう彼の頭の中には、「じゃあ裾の方はいくつで、真中はいくつで、どこに絞りを入れた舟をつくらう。」という具体的な形が思い描けるのです。だから設計図は書かないのです。でも、僕はその頭の中にあるものを分かっていたいから、あえてその設計図を描いてもらえないかと相談しました。ところが彼は今まで設計図を描いたことがない訳ですから、立面図だとか平面図という書き方を知らない。そこで、代わりに紙を切って、舟の形に貼り合わせ、それを開いたものを僕に渡してくれました。それによって、僕は話に聞いていたことを断然よく理解できました。材のどこがどうねじれているのかも、その紙を見せてもらったときに初めてわかった。同じように、他の方に話を聞いたときに、「ねじって製材をする」ということが分からなかったのも、粘土を使って説明してもらったことがあります。相手の話をより理解するためには、絵を描いてもらったり、模型をつくってもらったり、さまざまな工夫が必要です。

◆よくある困った状況への対応

①人生論よりも具体的なできごとの積み重ねが重要

相手の方がご自身の「人生論」を語ってくれることもあると思います。でも、「人間というのは、こういうもんだよ」とか、「人が生きるというのはこういうもんだよ」というような、ありきたりの言い方をされても、読者は面白くありません。その言葉の中味を示す具体的なディテールが欲しいのです。『聞き書き』の基本は、ディテールを積み重ねていくことです。「その人の人生がどうだったか」ということは、ディテールを積み重ねた中で初めてわかる

のです。たとえば石工さんの所に行って、なぜ石工さんになったのか、お父さんも石工さんだったのか、誰に仕事を教わったのか、何年教わったのか、最初にやった仕事は何だったか。そういうことを具体的に聞いて、一つ一つを積み重ねていく中から、その人の人生が浮かび上がってくるのです。

②お付き合いで聞かざるをえない話もある・話を元に戻す

『聞き書き』をしていくと、とかく話は横道にそれます。右行ったり左行ったり、子供の時代の話を聞いているのに、今の話になったりする。これは仕方ありません。これを聞かないと先に進まないのです、とにかく相手の話を聞くのです。そして、しばらく経ってから、「あの、先ほどの、小学校5年生の時のことですが、その時はどうしたんですか？」というように話を何度も戻してあげる。

原稿を仕上げるためには、この話の道筋をたどらなければということを忘れないようにしておかないと、後で原稿をまとめる時にどうしようもなくなります。「小学校5年生の時に、初めておやじに炭焼き窯に連れて行ってもらった。それが初めて作業を手伝った体験だ。」という話があったとします。では、その後、お父さんに何を教えてもらって、どういうふう炭焼きの仕事を覚えて行ったのか、と聞きたいのに、話は横道にそれて、「小学校5年の時は遠足で和歌山に遊びに行ってみてお城を見た」という話になったりするのです。あるいは、「隣のおじいちゃんが炭焼きの名人だったんだけど、趣味は将棋でね。その将棋の相手をよくしていたよ」という話になったりする。話は本題からずれていますから、「その話は結構です」と言いたいところですが、これはお付き合いですから仕方ないのです。相手の話を聞くようにします。そのためにも、録音テープは余分に持っていく必要があります。万が一テープが残り少なくなると、途中から話が上の空になる。それは相手の返事にもすぐに表れます。とにかく我慢して聞いて、しばらくしてから「ありがとうございました。それで、はじめてお父さんに炭焼き窯に連れて行ってもらったときの話に戻りますけれども……」

と相手の話を誘導します。

③「事実ではないこと」や「謙遜」を乗り越えて本心にせまろう

『聞き書き』には欠点があります。ひとつは、相手の方が本当のことを言っているかどうか判からない、ということです。もうひとつは、日本人の場合はほとんどがそうですが、自分のことを誉めることを嫌う、ということです。僕たちがいかにその人を尊敬して彼のすばらしいところを紹介したいと思って話を聞いていても、彼の言葉には自分を謙遜する言葉は出てきても、誉める言葉は出てこない。逆に、「自分が日本一だと思います」というような発言をする人がもし僕のインタビューの対象であれば、僕は途中から彼を尊敬できなくなるかも知れません。「その人の本心にいかに迫るか」ということも、『聞き書き』の面白さのひとつです。

6, まとめる

～読みやすく、人柄が良く見え、人生の裏側まで読み取れるものに～

『聞き書き』は「文学」という分野ではなくて、「文芸」というひとつ芸を持った仕事だと僕は思っています。その芸とは、まず「話を聞く」こと、それからその「話をまとめること」、この2つです。

では、2つめの「話をまとめる」ことについて説明しましょう。

◆テープ起こしは時間がかかる大仕事

テープの書き起こしは、時間のかかる作業です。録音時間1分で、だいたい原稿用紙1枚の文字数になります。だから1時間、『聞き書き』したテープを起こすと、原稿用紙 60 枚分になる。僕が1時間で書ける量は5～6枚。ですから1時間のテープを起こすというのは大変な作業なのです。僕はプロの方にテープ起こしを依頼しますが、2時間半のインタビューテープを午前中に渡して特急で仕上げただけでも、原稿が上ってくるのは翌日の夜 8 時ごろになることもあります。それほど時間がかかるものなのです。話して

いる言葉を文字に書き起こすというのは大変な作業なのです。

◆喋った中身を刈り取る作業＝植木屋さんと同じ作業

テープの書き起こしが終わると、次に文章をまとめます。

「小説」の場合は、自分がイメージしたものを作り上げていけばいいのですが、『聞き書き』というのは、相手の方が話したことが基本資料になりますから、皆さんがやる仕事は植木屋さんと同じく刈り取りです。もちろん刈り取った後に、自分の思っている枝を勝手に足すことはできません。だから『聞き書き』は、上手に聞いて、上手に刈り取って、ひとつの文章に仕上げていくという作業です。

①要らない原稿は全て消していく

要らない原稿は全て消していきます。話が途中からお天気の話になったり、孫の話になったりした。そこで要らないと思われるところは削ってあげればいい。そうするだけでも、文章の量は少なくなります。

②聞き手の質問はすべて消す

次に、聞き手の質問をすべて消します。そうすると残りは相手の答えだけです。質問を消していく作業をする時に、自分の質問の一部がないと相手の答えの意味が通じなくなるところがあります。たとえば「私はこれが大切だと思うのですが、大工さんはどう思われますか？」「その通りだと思います」といったやりとりの場合、自分の質問を残しておかないと文章になりません。その時は、大工さんの言葉として「これは大切だと思います」と繋げる。また、「どんなノコギリをお使いですか」という質問を削る場合、大工さんの言葉で「ノコギリの話ですが……」と繋げる。そういう作業をしながら、まず質問事項を消していきます。

③「あのう」「～だけど」など癖でくり返される言葉を削る

話言葉には「あのう……」とか、「……でね」とか、その人の癖で何度も繰り返される言葉があります。たとえば「そうなんだけど」「これは蚤で削ったんだけど」というように、語尾は全部「けど」で終わる癖の人もある。そういう言葉をすべて文章に残すと、とても読みづらいものになります。この場合は、話し言葉のニュアンスを崩さないように注意しながら、文章をまとめるときに整理し、削っていきます。

◆文章を変えることはどこまで許されるか？

原則①その人の人格を崩さない

原則②言っている趣旨を曲げない

文章を整理していくと、どこまで変えていいのか、付け加えていいのか、という問題が出てきます。これはとても難しい問題で、一字一句、絶対変えてはいけなくなると、文芸作品、読み物としてはきれいに仕上がってこない。文章を整理するときには「本人の人格を崩さない」、「話している趣旨を曲げない」というのが、まず最低の条件です。その上で、あの人が言いたかった趣旨を考えれば、この言葉に置き換えても決して間違いではないだろう、という範囲で調整していきます。

◆どの文字を使って表現するか

方言でインタビューに答える人もいます。その時に、「んじゃ」という言葉を使ったとする。「んじゃ」というのを、どう書きおこすか。文字に表すと、「んじゃ」にするべきか、「うんじゃ」とするべきなのか。一個一個の字をおこすたびに考え込みます。それから、「そうですねえ」と言った時の「え」をおこすかどうか。原稿によっては小さいカタカナのエを入れて、それを再現している人もいます。それから「え」をおこさずに「ね」で止めてしまう人もいます。話す言葉の音の幅の広さが50音のひらがなにはあてはまらないので、それだけで皆さんは大変な苦勞をすることになります。

もうひとつ迷うのは、どこまで漢字で表現していくか、ということです。例えば秋田の人は、背中を「へなか」と言う。それを漢字で「背中」と起こすか、「へなか」と表記するか。ただ「背中」という漢字で原稿を起こすと、そのお爺さんは標準語で喋っ

ているようにとられてしまう。そういう『聞き書き』は、その時代の風俗や言葉遣いを表現してる『聞き書き』として正しいかどうかという問題にぶつかります。あるいは、このおじいさんが喋っていた時にはもっと柔らかい感じに聞こえたのに、自分が起こした原稿を読むとぶっきらぼうに感じるのはなぜだろう、という疑問を感じることもあるかも知れません。「へなか」と書くか、「背中」と書くか。あるいは「背中」という漢字に「へなか」というルビをふるか。あるいは注をつけるのか。どういう表記がふさわしいかを考えて、工夫してみてください。

それから、自分自身を指す言葉にもさまざまな言い方があります。「俺」「私」「僕」。そのお爺さんが話す中で興奮してくると、「わしはなー」といったりする。でも「わし」で通すとおっかないお爺さんのような印象をもたれてしまうかもしれない。その部分だけ「わし」にすればいいか、という、そうでもありません。文章全体としてはある程度の統一をとりながら、おじいさんの性格を全体としてうまく表現するように言葉を選び、文章を仕上げなければいけない。そういう作業をするたびに、「言葉って何だろうか」と考えてみたりもします。

◆話のまとまりごとに、小見出しをつけて整える

ある程度、文章を整えたら、次に話をブロック(ひとつのまとまりのある内容)ごとに整理して、たとえば「ノコギリの話」という付箋を貼るなり小見出しをつけていきます。必ずしも、話の順番通りに文章をまとめるわけではありません。「ノコギリの話」が何回かあって、その話を集めた方が良ければ、一緒にまとめます。「ノコギリの話」と「ノミの話」を比較することでノコギリの鉄の素材がわかる、というような場合には、その2つの話を組み合わせる。そして、最初に作ったプロット(話の流れ)を修正し、形を整える作業をします。その過程でいらぬ言葉、何度も繰り返されている言葉を削っていきます。

そして、僕が書いた原稿を本人に見てもらおうと、ほとんどの人は、自分が言った通りじゃないか、と思う。でも僕はその人の原稿を仕上げるために、多分全体を15分の1か20分の1に削って、最初

のインタビューで聞いた話と、5回目ぐらいのインタビューに聞いた話をまとめて、ひとつのブロックにし、センテンス(文章)を仕上げているわけです。

西岡棟梁にインタビューして法隆寺の本を作ったときにも、棟梁は全部自分が喋ったままが書かれていると思ったでしょうけれど、僕は棟梁の話の切ったり貼ったりしながら文章をまとめたのです。はじめのインタビューはもう今から18年ぐらい前だと思いますが、コピー機をそばに置いて1回作った原稿をコピーして、それを切り貼りして、組み合わせさせていく。もとの原稿がわからなくなると困るから全てコピーを取って作業をしました。手で書いて、切ったり貼ったりしていくと、膨大な時間がかかります。でも今はパソコンで処理できます。パソコンには元のファイルを保存し、コピーしたファイルで何度も修正しながら上書き処理を繰り返していけば、元の原稿も残るし、新しい原稿もつくることができます。

◆楽しく興味がわくように工夫する、しかも事実のまま

①並べ替え

②頭に物語や事件をおこす

③面白い小見出し

さて、ここまでできたら、改めて小見出しを1枚の紙に書き並べます。それをどう並べたらその人の人生が浮かび上がってくるだろうか。子供のときの話から時系列に修行中へとつなげた方がいいだろうか。それとも一番先に親方に怒られて失敗した時の話を持ってこようか。小説でも何でもそうですが、文章の書き出しというのは大切です。のろのろと話を始めてたのでは、読者は読んでくれない。説明的な文章をずっと読まされると飽きてくる。だから最初から事件(印象的なできごと)で、物語を起こす。その事件に関心をもってもらうことで物語を展開していく、というやり方がある。『聞き書き』の文章をまとめる場合にも、そういうやり方があってもいいのです。

例えば石工が石垣を作ったり、ノミ一個で石の形を変えていく作業をどうやってやっていくのか、という話の場合、「30センチ×30センチ×1メートル

ル80センチの石の棒を、一人で作り上げることできたら一人前です」といわれると、「あ、そうかなー」と思うと思う。マタギの人たちの話であれば「獲物をしとめた時には、『あぶらおんけんそわか』と言って祈ります」というと、「あ、そういうしきたりがあるのか」と思って、文章を読み始めた時に入りやすくなる。そういう作為は文芸という意味での『聞き書き』でいえばありえるわけです。ですから、どう話の順序を並び替えればインパクトを与えられるか。いかに面白い小見出しをつけられ、読み手を引きずり込んでいけるのか。その人の話を、興味をもって読んでもらえるものに仕上げるとというのが、『聞き書き』の最後の仕事です。

聞いてきたことをただ書くだけでは、子どもの宿題と一緒に。楽しく、興味をもって読んでもらえる、と同時に「事実」でなければいけない。語られる言葉は、その人らしい、その職業の人でなければ使わないだろうという言葉が織り交ぜられ、それでいて大工なら大工という生き方が浮かび上がってくれば、それは大成功です。

7, 原稿をその人に戻して確認

◆話してもらったことの重さ

「聞き書きの面白さのひとつは、初めてあった方にいろいろな質問をしてお話を聞けることだ」と初めにお話しました。これはこの職業の特権です。おじいさんおばあさんたちに会って話を聞いている途中で、「これから先の話は、実は自分の子供にも女房にもしたことがない」といって僕に話してくれる事がたくさんあるのです。そんな話を、しかも年配の方から聞いていると、まるで「遺言」を聞いているような気にもなります。でも、文章には分量的な制約がありますからその中身のすべてを僕は書くわけにはいきませんし、話した本人にとっても、それをすべて書いて果たしていいだろうか、という問題もあるのです。ですから、『聞き書き』の場合は、必ずでき上がった原稿を本人に読んでいただきます。ご本人に了承をいただいて初めて、その内容を本にし、出版することができるのです。

8, 最後に

『聞き書き』の鉄則は、相手の方に精一杯の敬意を表してお話を聞くこと。皆さん初めての作業ですから、精一杯の努力で、頑張してほしいと思います。